

土岐小百合

一本の樹から はじまつた



土岐小百合



日本の樹からはじまった

アリス館

一本の樹「けやき」

六年東京都生まれ。

Zelkova serrata (被子
双子葉離弁花類、ニレ科、
属)。一九八九年に人災に
される。享年一〇三年。

百合(文)

四年東京都生まれ。著述
業、編集者。出版社勤務後、一
九八四年に独立。編集、企画会
社を設立後、出版社を創立。一
九九〇年、写真誌「デジヤブ」
を創刊。

下中葉穂(イラスト)

一九六〇年千葉県生まれ。造形
家。立体作品、日光写真、コラ
ージュ、イラスト、文章、看板
など「かたち」を作る仕事いろ
いろ。くさつばら公園世話人。

土田ヒロミ(写真)

一九三九年福井県生まれ。写真
家。写真集『俗神』、『ヒロシ
マ』、『砂を数える』、『奥の細道
を歩く』他。一九九三年、東京
総合写真専門学校校長。



一本の樹からはじまった

一九九四年六月十日 初版発行

著者——土岐小百合

発行人——小林 佑

編集人——後路好章

編集——渡辺一夫

発行所——株式会社アリス館

郵便番号 一一二一

東京都文京区目白台二一四—二三

電話・営業部 (〇三三) 五九七六—七〇一一

電話・編集部 (〇三三) 五九七六—七〇二三

振替・東京九一四二五〇二

印刷所——光陽印刷株式会社

製本所——難波製本株式会社

© S. Toki. 1994 printed in Japan

ISBN 4-7520-0022-9 C8395

NDC916 160P 22cm

落丁・乱丁本はおとりかえします。
定価はカバーに表示してあります。

一本の樹からはじまった もくじ

一本の「けやき」 四

「一本の樹プロジェクト」が誕生 たんじず 二〇

最後には、わたしたちが「けやき」をたおした 三六

幹も根も切られ、分けられていった みき 六六

展覧会にむけて事務局は動きだした てんらんかい 八四

ひとりひとりの手で「けやき」は変身する へんしん 九二

展覧会を開くには、やるべきことがいっぱい てんらんかい 一一〇

「一本の樹から地球へ」展 てん 一二二

あとがき 下中菜穂 一五四

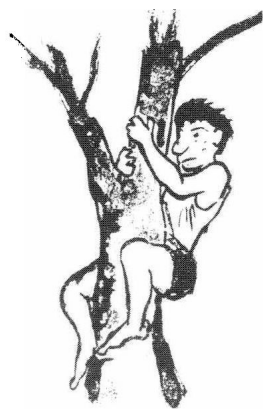


写真 土田ヒロミ、大倉将則、小作明則、下中菜穂、田島茂雄、肥後充、松倉一夫、村田一彦
表紙・本文イラスト 下中菜穂／表紙・本文イラスト版下作成 高田栄一





ああ、こんなに広い空があつたんだ。

一九八九年十一月二十六日、「けやき」を切ったつぎの日、わたしはまぶしい朝の光のなかで、きのうまで、多くの葉をしげらせていた枝のあつたあたりを見あげていた。わたしは生まれてはじめて、庭から、こんなに広い青い空を見た。

今はない「けやき」は、幹が周囲約三メートル、大人がふたりでかかえるくらいあつた。枝はむかしの三階建ての小学校の屋上をこえてのび、左右は二〇メートルをこえるほど広がっていた。その日は、庭を歩きながら「けやき」のあつた場所の、まぶしく照りかがやいている青い空を何度も見た。これほど多くの光を吸って「けやき」は立っていたのだ。

空を見ていると、北のほうから黒っぽい鳥が一羽飛んできた。「けやき」のあつたところでちよつとスピードをおとした。しかし二、三度ぐるりとまわつて、そして行ってしまった。あの鳥は、いつも「けやき」で、ひとやすみしていたのだろうか。それとも虫を食べていたのだろうか。

一本の「けやき」



東京都渋谷区しふやひろおの広尾にわたしの実家があった。「けやき」は、わたしの生まれるずっと前からここに生えていた。恵比寿駅えびすから山手線の内側へ向かって徒歩七分、関東大震災のよく年、大正十三（一九二四）年に祖父そふが西洋館を建ててから、そこに住みつづけている。

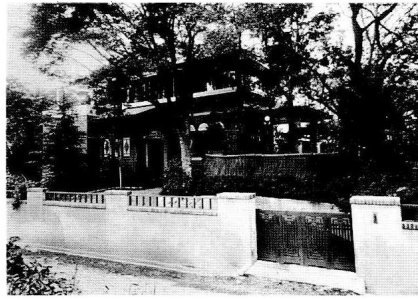
七十年ほど前に引つ越してきた当時、ここは、東京府豊多摩郡渋谷町大字下渋谷字居村あざいおかざき。「岡崎の森」とよばれる樹木豊かな土地だった。

東京の中心部日本橋生まれの祖母そぼにいわせると「タヌキの出そうないなかつた」そうだ。家の前の道はまだ舗装されず、人力車や馬車が通っていたという。

当時は、大きな木がまだまだ多く残っていたそう。現在でも近くの代官山^{だいかんやま}あたりには、大きなケヤキがわづかばかり残っている。うちの「けやき」の親類かもしれない。

家の周囲^{しゅうい}をおさめた大正時代の写真を見ると、舗装^{ほそう}されていない砂利道^{じやりみち}ぞいに、





一九二五（大正一四）年ごろの西洋館と「けやき」

三角形の屋根をもつ西洋館がある。その横に、細い「けやき」が立っている。

父が子どものころの印象では、家が大きく、「けやき」はピラミッド型の屋根より低かったそうだ。

わたしは一歳のときから二十七歳でこの家を出るまで、「けやき」の下で暮らしていた。とはいっても、正直いうとわたしの思い出のなかで「けやき」の印象はうすかった。ケヤキが食べられる実をつけないことも、楽しい思い出につながらない理由のひとつかもしれない。

しかし、いざ切られるとなると、印象のうすかった「けやき」の思い出が、ぼつりぼつりとわたしの頭のなかをよぎりはじめる。

そういえば「けやき」には、ヘビがすんでいるともいわれた。タマムシもいた。父はそこでよくセミとりをしたそうだ。

幹の樹皮は、ウロコ状にでこぼこになっていた。ケヤキの老木の特徴である厚さ五ミリぐらいにめくれかかった皮は、手ではがすと、ぱかっととれてそのところだけ明るい茶色のはだになる。それが、くすんだ緑がかかった茶色い樹皮のなかに新鮮にうかびあがって、生き生きと見えた。



「けやき」は、表の門から砂利のしきつめられたスロープを上がった表玄関のわきに立っていた。枝はへいをこえて、道路にのびていた。秋には、道路やとなり近所の庭先や広尾ひろお小学校のプールに、大量たいりきの落葉をふりそそいだ。

土の上につもった葉は、やがてはくさり、ダンゴムシやミミズに食べられて土にかえる。しかし、アスファルトの上に積もった葉はごみになる。毎朝のそうじの手間もさることながら、母はまわりの家への気がねをよく口にしていた。

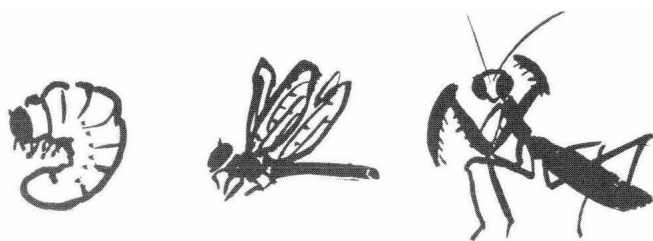
「けやき」の落葉は、わが家の庭にもたくさん積もった。植木屋さんが掃き集めた葉は、庭のかたすみに山となっていた。毎年、新しい葉が上に積まれた。茶色の山は下にいくとだんだん葉の形がなくなり、やがてたい肥ひとなる。

「たい肥を入れよう」

花壇かだんに種をまくとき、父はいつも新しい葉をどけて、落葉の山の下から葉の形がくずれかかっているたい肥をシャベルでとりだした。

庭に積もった葉を集めて、落葉たきもした。サツマイモを焼いた。冬の楽しみだった。

「おき火になってからのほうがいいよ」



このようにいわれても、待ちきれずに、ほんぼん炎^{ほんのり}が上がっているのにサツマイモを入れてしまい、真っ黒けなイモの炭を作ってしまったことがあった。

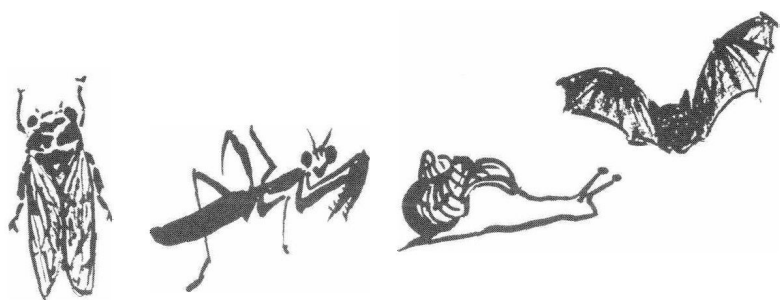
秋にはたくさんの葉を落とす「けやき」も、芽^めぶきの時期はほかのケヤキとくらべて近年めつきり遅^{おそ}くなってきた。まわりのケヤキが新緑になっても、「けやき」はうんともすんともいわない。

「立つたままで枯^かれちゃったのかしら」

わたしは、ひそかに心配したこともあった。数日たつて枝のひとつに、ちらりと黄緑色の芽ぶきが見えるとはっとしたものだ。

わが家は高台にあった。恵比寿^{えびす}駅から渋谷^{しよや}へ向かう山手線の車窓^{しゃそう}から注意して見ると、家並^{やなみ}ごしに「けやき」のてっぺんが見えていたことも思いたす。子どものころは、このことがちよつぱり自慢^{じまん}だった。もつとも、わが家の西洋館が立つた大正時代のころには、「けやき」は渋谷^{しよや}駅^{えき}からでも見えていたそうだった。

わたしは、切られる前に山手線の車窓^{しゃそう}から見える「けやき」の姿^{すがた}を映像^{えいぞう}におさめておきたくなった。しかし、「けやき」は、高いビルとビルの間に、ほんの一瞬^{しゅん}だけその頭をちらりと見せてくれただけだった。



それから、夏の日のミンミンゼミの声。小さなころから慣れっこになっていたわたしにとっては、「ミンミンゼミが鳴きだした。また夏だ」という感想しかなかった。しかし今にして思えば、都内にしてはすいぶんたくさんのセミがいたのだろう。幼いころ、夏の日に泊まりに来たいところが、朝早くから鳴きつづけるセミの声に眠りをさまたげられた、と文句をいいながら起きてきたことがあった。むかしは、それほどうるさくひっきりなしにセミが鳴いていたのだ。

セミはもちろん「けやき」だけでなく、まわりの木にもいるだろう。でも、あのつぎからつぎへと所を変えながらふりそいでくるせみしぐれは、たくさんの枝をのばす「けやき」のおかげにちがいがなかった。毎年、少しずつ減ってはいたが、最後の夏の日にもセミの声をきくことができた。

セミの声が少なくなっていくにしたがつて、わが家のまわりの緑が減っていった。遊び場だったおぼけやしきとよばれた廃屋もなくなり、近所の木が一本、二本と切られた。タマムシもスズメガも、カマキリも見られなくなった。

道路ができた。

ビルが建ち、空がだんだんせまくなった。

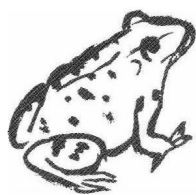
でもまわりが変わっていても、「けやき」はゆっくりゆっくり伸びつづけ、わたしの思い出もこのように少しずつ厚みを増していった。

そんな「けやき」のあった土地も、祖父が死に、祖母と父とおじが土地を分けた。地価高騰による相続税の急激な上昇のなか、おじは彼の分の土地を持ちつづけるためには、マンションを建てなければ無理になったと判断した。

マンションを建てるとなれば、「けやき」は切られ、となりの西洋館もなくなってしまう。西洋館は、屋根裏部屋のついた木造二階建てのドイツ風の建物だ。祖父は、当時のドイツの建築雑誌を見て研究していたらしい。建築の専門家によると、大正末期から昭和初期にかけてよく見られたドイツ・コッテージつまり郊外別荘風の住宅だそうだ。

西洋館は、運よくその歴史的価値を認められた。わが家に縁のある群馬県沼田市の沼田公園に移築され、「郷土人物資料館」として使われることになった。

しかし、「けやき」のほうは、このままでは切られて、ごみとして捨てられるし



かなかった。

「このままごみにするのはしのびない。『けやき』のために何かしてあげなくては」
何ができるだろうか、わたしはばくぜんと考えていた。だが、この気持ちを
行動にうつすまでにはいたらなかった。

気持ちが動きたしたのは、西洋館に住んでいた祖母^{そぼ}が引越をしたあとのこ
とだ。無人になった西洋館で、造形作家^{ぞうけい}で仲よし^{なか}のナボが八月八日から十二日ま
で個展を開いたときからだ。ナボの本名は下中菜穂^{しもなかなほ}。同い年の子どもを持つわた
したちは、まるで気のあう家族のような関係だった。

夏も夏、夏のまつさかり。太陽がようやく真上から照りつける昼さがりの
ことだった。個展^{こてん}のお客さんがとぎれた時間をみはからい、わたしとナボは、二
階の石造りの六畳^{いしづく}ほどのバルコニーに、むかしからあるひじつきの籐^{とう}のいすを持
ちだしてすわった。

間近に「けやき」の葉がある。地上からでは遠かった緑が、二階に上がると急に
近くなる。

ミンミンゼミが、ミーン、ミーン、ミーンと右上で鳴^ないている。それが終わる





と、左の木のてっぺんのほうから、ミーン、ミーン、ミーンと声かふってくる。近くの道路の騒音も、近所のテレビの音も聞こえない。

風が吹く。汗ばんだ皮膚に、涼しさがはしる。「けやき」の葉の表と裏の色が、太陽に照りかがやきながら入りみだれる。サワサワと音をたてる。

風がまた吹く。葉が動く。無数の葉のひとつひとつは、ちがった動きをしているが、それぞれの動きはリズムカルだ。わたしは、催眠術にかけられたように、動いている葉から目がはなせなくなった。濃い緑の葉の重なりあう「けやき」の姿は、これが最後だ。そんな思いがよぎる。

「『けやき』は、今年いっぱいもう生きていられないのね」

緑の葉を見あげて、わたしはつぶやいた。

「この冬には、ごみとして捨てられるってことよね。どうにかして『けやき』を残すわけにはいかないかしら」

ナボが問いかえす。

「この木があると、マンションを広く建てられないらしいの。枝がこれだけ広がっていても、その下に大きな建物は建てられないわ。たくさん部屋ができないの

で、効率が悪くなってしまうんですって」

「あなたの土地じゃないものね。持ち主の人には、それなりの考え方があるのだから、切ることもしようがないのかしら。どこかへ移植できればいいのにね」

「それができれば、いちばんよね。これだけ大きいと、動かすのもたいへんそう。専門家を探して聞いてみようか」

個展が終わってから、ふたりは動きはじめた。うまく移植できるのだろうか。切らずにすめば、それにこしたことはない。だれに相談をしたらいいのだろう。結局ナボが、樹のお医者さんといわれる人を見つけ電話をした。ナボは、「けやき」の状態を話した。

「それぐらい大きな樹を動かすとなると、まわりのビルや電線がじゃまになるでしょう。移動のために大型ヘリコプターを使うとなれば、ばく大な費用がかかります」

電話のむこうの声は気の毒そうに、しかし親切に説明してくれた。